

[書評]

窪菌晴夫著

『語形成と音韻構造』

前川喜久雄

1 著者について

著者の窪菌晴夫氏は英語音韻史の分野で研鑽をつんだ後に英国への留学を機会に日本語の本格的な研究に転じた研究者である。エディンバラ大学に提出された学位論文は日本語のイントネーションに関する実験音韻論的研究として国際的に高い評価をうけたが、帰国後は日本語音韻についての理論的研究を活動の中心に据えている。本書におさめられた研究の一部は学位論文にその萌芽をみることができる。

氏の著作は常に論旨が明快である。また英語には存在しない日本語固有の言語現象を特殊な事例(英語を素材とする理論への反例)として提出するにとどまらず、もう一段高い立場から汎言語的に眺めようとする志向が感じられる。そのため、最終的に賛成するしないにかかわらず氏の仕事には啓発されることが多い。昨今、国際的な言語学系学術雑誌で頻繁に氏の名前をみかける理由も、そういうあたりにあるだろう。

2 本書の特徴

タイトルが示しているように本書は種々の語形成にもなって生じる音韻現象を日本語と英語を素材として分析した著作である。語形成のタイプとしては語の複合と混成がとりあげられている。複合をとりあつかう2章ではアクセントとストレスが、混成をとりあつかう3章では音節構造が主要な音韻現象として分析の対象となっており、さらに音節量の問題が4章でとりあげられている。これらの問題はいずれも、日本語に関するかぎり、従来研究がゆきとどいていたとはいいがたいものである。

対照研究としての本書の特徴についても触れておこう。対照研究には大きく分類して、対象とする言語間の差異に焦点をあてるタイプの研究と、反対に言語間の共通性に焦点をあてるタイプのものがある。本書は後のタイプに属している。序章のなかで著者も述べているように、統語論の理論的研究に範をもとめて抽象的なレベルでの形式的な言語普遍性を追求することが本書の基本姿勢である。

以下、章建てにしたがって本書の内容を紹介しコメントをくわえる。コメントは研究方法に関するものと日本語の言語事実に関するものにとり、英語に関する分析についてのコメントは原則として避ける。評者の能力上の問題もあるが、著者の本来的興味も日本語におかれていると感じるからである。

3 複合語の分析

語の複合をとりあつかった第2章は量的に本書の中心をなしている。実際に分析されているのは複合名詞であり、用言の類に関する分析はない。これは用言類のアクセントが比較的単純であり規則性にとんでいるからであろう。

日本語にも英語にも複合語形成にもなって要素となる語彙項目の音形を変更する複合語音韻規則群が存在する。日本語の場合アクセントや連濁、英語の場合ストレス付与規則がこれに該当するが、いずれの言語においても統語的には一語としてふるまいながら音韻的には複合語音韻規則群の適用の例外となる語が多数存在する。日本語の場合「一夫多妻」や「九州南部」のように複合語の内部にアクセント句境界が存在したり、場合によっては複数のアクセント核が存在したりする語群である。

著者は、複合語音韻規則に従う典型的な複合語と上述のような例外となるタイプの複合語の根本的な相違点を語形成の過程においてアクセント句形成規則が適用されるか否かにもとめ、何がアクセント句形成を阻止するかについて多面的な考察をくわえている。

この種の語については国語学の領域においても早くから注意がはらわれており、林四郎氏による「臨時一語」という名称が定着している。しかし、従来の国語学者の研究は語彙論的・形態論的なものが中心であり、音韻面の研究は十分ではなかった。筆者はこの空隙を埋めようとするのである(ちなみに、音声合成にたずさわった工学者のなかには、本書にも引用されている佐藤大和氏など、臨時一語的な語構造の音韻面に正面からとりくんだ研究者がいることはもっと知られてよい事実である。任意テキストを入力とする音声合成システムを構築しようとすると、テキスト中に頻出する新語・造語の類に適切なアクセントを付与する必要に直面するからである)。

著者はアクセント句形成が阻止される要因として1) 意味制約、2) 枝分かれ制約、3) リズム制約の三種を認定し、抽象的なレベルではこれらの制約はいずれも日英語に共通して存在すると結論づけている。普遍性の問題はさておき、日本語に関するかぎり本書において提出された分析は複合名詞アクセントに関する現時点でもっとも包括的な理論的分析であるといつてよいだろう。特に枝分かれ制約とリズム制約がイントネーションと複合語アクセントの双方に制約として機能しているという指摘は重要である。複合語音韻規則適用の例外となる複合語(≒臨時一語)が複合語というよりもむしろ句構造であることを強く示唆する事実である。

一方、意味制約に関する議論にはひっかかりを感じるが多かった。もっとも根本的な問題は、提案された種々の意味制約の相互関係である。本書では意味制約が生じるケースとして、並列構造(Ex. 不偏不党)、組織名+役職名(防衛庁長官)、人名(三木武)、チーム名(ヴェルディ川崎)、氏名+地位・役職名(湯川博士)、格関係(首位攻防)などの例が呈示されているが、これらの意味的關係が相互に独立しているのか、それともさらに抽象的なレベルで少数の意味特徴に還元できるのかが明らかでない。もしこれらのケースが意味的に全く独立しているならば「日本語と英語において複合語音韻規則の適用を阻止する意味条件が偶然とは言えないほどの類似性(p.82)」を示すと主張することができるだろう。し

かし本当にそうだろうか。これらのケースを抽象的なレベルで少数の意味特徴に還元できる可能性はないだろうか。

著者は意味制約について「全体としては、前部要素が後部要素を修飾してその意味を下位範疇化するような構造の大半は、日本語でも英語でも音韻的に複合語としてまとまりを示すようであり、他方、そのような意味構造を持たない場合には音韻的に一語にまとめられず、意味制約を構成すると言える (p.81)」と概括している。これは要するに典型的な複合語の意味特徴を有するものは音韻的にも複合語としてふるまうということであろう。制約の本質はこれに尽きているのではないか。

もしこの考えが正しいならば、複合語音韻規則の適用に対する制約の問題は何が典型的な複合語であるか、典型と非典型との境界を意味論においてどう計算するかという問題に帰着することになるだろう。2)の枝分かれ制約もまたこの方向でとりあつかうことができそうに思える。2章5.1節の記述をみると著者もこの問題に気づいているようなので、今後研究の進展が期待できそうである。

4 混成語の分析

第3章が対象とする混成(blending)は、ゴリラとクジラからゴジラが、また smoke と fog から smog が生成されるように、要素となるふたつの語の一部を結合するタイプの語形成である。混成の現象は日本語に関するかぎり従来あまり論じられてきていないようだが、本書を読むと言語生成過程の心理言語学的研究にとって非常に面白い研究対象であることが実感できる。

評者が一番興味をひかれたのは、混成の過程を $AB+XY=AY$ と表わしたとき、AYの長さがXYと同じになることが多いという「長さの制約」である。混成を意識的に利用した造語(ダスト+ゾーキン⇒ダスキ、ロッテ+カフェテリア⇒ロッテリアの類)にも、無意識に生成された発話エラー(ドーシテ+ナンデ⇒ドンデの類)にも共通して観察されるというこの現象は、音声生成過程の出発点としての辞書検索のありかたについて重要な何ごとかを示唆しているように思える。

この章における分析のもうひとつの眼目は、日英語の音節構造の差異に関する議論である。上式でABからAを、XYからYを切りだす際に、音素列をどこで切るかを観察すると、日本語ではモーラ境界が切断位置となるのに対して、英語では音節の頭子音と核母音との境界での切断が多いことを筆者は独自のデータによって示している。CVを単位とするモーラに慣れたしんだ日本語話者は英語の閉音節CVCにおいても最初のCとVとが強く結合しているように考えやすいが、実際に強く結合しているのはVとそれに後続するCなのである。

第3章の議論について指摘したい問題は以下の三つである。まず発話エラーによる混成のなかには原理的に検出不可能な混成が存在する。例えばゴジラとモスラを要素とした混成では、ゴ(ジラ)+ (モ)スラ⇒ゴスラのように混成であることが明確な語形も出力されるが、一方、ゴジ(ラ)+(モス)ラの出力はゴジラとなり、エラーとしては記録されないはず

である。混成エラーの統計的分析ではこの可能性を一応考慮しておく必要があった。ただし、この種のエラーが仮に検出可能であったとしても、長さの制約に関しても結合点に関しても、筆者の結論に悪い影響をおよぼすことはないから、分析の欠陥というほどのことではない。

第二は混成語のアクセントに関する分析がおこなわれていないことである。この問題は筆者自身も指摘しているので(p.199)、いずれ分析が公開されることを期待したい。混成語のアクセントはアクセントの音韻表示の理論にとって貴重な研究材料を提供する可能性が高い。

第三に本書全体にも通じる要望として「規則」「制約」「条件」「原則」「原理」という術語の使い分けをはっきりと説明してもらいたい。生成文法の統語論では island constraints と subjacency condition に見られるように constraint と condition をほぼ同義に使用する傾向があるようだが、本書もそうなのだろうか。あるいは constraints は規則への入力に課される条件というような意義の分化があるのだろうか。また「規則」と言えば通常 $A \rightarrow B/X _ Y$ の形の書き換え規則をさすものだが、「多くの語形成過程に共通する原理」として「右側主要部規則」という原則が指摘されている (p.190、下線は前川) というような文を読まされると理解に苦しむ人が多いだろう。全体として著者の文章はきわめて平明であるだけに、この点が気にかかる。

5 音節量に関する分析

第4章では語形成の問題から離れて音節量 (syllable quantity) の問題が論じられている。評者はこの章から学ぶことが多かった。英語母音の通時的音韻変化に例をとった音節理論と音節量の説明は実にわかりやすい。また日本語の超重音節において「おばあさんㇿっこ」が「おばあさㇿんっこ」とならない理由についての音節量に関する制約を仮定しての説明も、まことにスッキリしたものと感じる。これらの議論は以前に口頭発表でも聞いたことがあったが、今回本書にまとめられたものを読んで初めて本当に理解できた気がする。

著者はこの章で日本語はその歴史を通じて軽音節から重音節へと移行する傾向にあると主張している。この大胆な主張については様々な反論もあることだろうが、この主張に同意できないとしても、本章に示された現代日本語の分析はそれと切り離して評価されるべきである。

言語事実に関する問題点を指摘しておくとして「音便以外の音変化 (p.233)」として挙げられている akaki > akai は形容詞のイ音便であろう。もうひとつ、同じ箇所挙げられている kawi > kai (貝) と toworu > tooru (通る) は、ハ行転呼およびワ行ア行の部分的融合という通時的音韻変化の結果であり、子音脱落とは同一視しない方がよいだろう。

6 まとめ

ひとつには形式的普遍性追求の必然的帰結として、そしておそらくは著者の基本的性向として、本書の分析は帰納的であるよりも演繹的であり、悉皆的総括的であるよりもモデ

(58) [書評]『語形成と音韻構造』

ル構成的である。筆者の議論は大胆であり、国語学の研究姿勢に慣れたしんだ読者にとっては時に放埒と映るかもしれない。しかしそれをもって重大な瑕疵と判断すべきではない。筆者が分析する音韻現象の多くは、従来の国語学的研究においてもその存在が記述されてきた現象であるのに、それを「説明」しようとする試みがほとんど存在していなかったことこそが問題である。

一言でいえば本書の研究姿勢は現在の国語学研究における主流とは相当に隔たっている。そして、正にそのために本書は国語学の音韻研究にとって貴重な貢献たりえているのである。

(1995年5月11日発行 くろしお出版刊 A5判 vi+284頁 4650円)

付記：上野善道氏が最近公開された以下の論文には窪蘭氏の複合語アクセント研究についての言及がある。参照されたい。

1 「語構造の違いはアクセントに反映されるか——同音語の例に基づく考察——」

『日本語研究』16、pp.1-24、1996。東京都立大学。

2 「複数のアクセント単位からなる複合語」『言語』25、11、pp.57-63、1996。大修館書店。

——国立国語研究所 室長——

(平成9年2月15日 受理)